

# 新生児の痛みのケア

特集にあたって

## 「NICU に入院している新生児の痛みのケアガイドライン」を普及させよう！

2014(平成26)年12月27日、日本でもようやく「NICU に入院している新生児の痛みのケアガイドライン」(以下、ガイドライン)が発表されました。作成に携わったわれわれは、ただ“紙”や冊子としてあるだけのガイドラインではなく、臨床で使ってもらえるガイドラインをめざしました。

痛みをとまなう処置は、毎日ベッドサイドで行われていることです。毎日ガイドラインを使いながら、よりエビデンスの高いデータを出し、ガイドライン自体をブラッシュアップしていく必要があります。エビデンスの高いデータを出すことで、周りの医療者から信頼を得ることができ、看護師としての仕事のやりがいを感じることでしょう。また、新生児病棟では、毎年多くのスタッフの入れ替わりを経験します。したがって、それをふまえた教材の開発および教育を行わなければなりません。

そこで今、筆者が委員長を務める日本新生児看護学会「NICU に入院している新生児の痛みのケアガイドライン」委員会では、第1段階でもある“多くの人にガイドラインの存在を知ってもらう活動”を事業として行っています。1つは講習会の開催です。2015(平成27)年の開催は、福岡、大阪、東京、盛岡の4カ所です。視覚と聴覚を利用してガイドラインの内容を知ってもらいます。本特集を企画したのも、月刊誌『小児看護』などにふれる機会のある小児医療に携わる多くの人たちや小児実習を行っている学生たちに、新生児も痛みを感じていること、痛みを軽減するために私たちが行わなければならないことを理解してもらいたいためです。

NICU に入院している早産児などの痛みの生理については、まだよくわからない部分が多くありますが、未熟な新生児ほど痛みを感じやすく、痛みによる適切なケアが怠ると、発達に障害を起こす可能性が示唆されています。そのような事実がわかるなかで、欧米では痛みに対するガイドラインが次々と発表されています。幸い日本では、昔からミニマルハンドリングが普及していて、現在は多くの施設でディベロップメンタルケアが行われており、新生児の痛み緩和についても多くの人たちが関心をもっていらっしゃると思います。ただし、そこに医師のかかわりが少ないことを心配

しています。

「NICU に入院している新生児の痛みの軽減を目指したケア」に興味があるうちに、記録用紙をつくり直す。入職1年生にバイタルサインの測定を教えるときから「第5のバイタルサインとしての痛み」の評価を行うことの必要性を説明するよう教育方針を変化させる。筆者は、2015年が日本の“新生児の痛みのケア元年”になることを祈っています。

「どんなふうにしたら、痛みの評価ができるのかしら」と疑問に思えたら、それが始まりです。きちんと評価ができなくても、痛み刺激を与える処置やケアのときだけ評価をしたとしても、そこから評価の能力が向上するとは思いませんか？

痛みをとまなう処置をしなければならない新生児のケアのプロトコルを作成するとき、シヨ糖で痛みをそらして処置を行うのか、痛い処置を経験させただけその後にはやさしいケアをきちんと提供するのか、どちらがよいのでしょうか。皆さんも素直な心で、その新生児が行ってほしいことを考えてみましょう。筆者はシヨ糖派ではありませんし、シヨ糖を使わない人でもありません。筆者自身のなかでは、この子どもはシヨ糖を使用したほうがその後のケアを行いやすいかがわかりますし、この子どもは静かに採血をすれば泣かないのかもわかります。新生児を長年観察していたら、予測がつくようになるのです。しかし、その能力は看護師だけではなく、母親も同じように身につけるべきだと考えています。筆者の子どもではなく、その母親の子どもなのですから。いつかは看護師が、「今日はどうかしら？」と家族と会話することが筆者の夢です。

新生児看護はもっと家族と協働して行うべきです。痛みのケアの施行者が家族になる日を楽しみにしています。

日本新生児看護学会「NICU に入院している新生児の痛みのケアガイドライン」委員会委員長  
埼玉医科大学総合医療センター  
総合周産期母子医療センター副センター長  
内田美恵子 Uchida Miekko